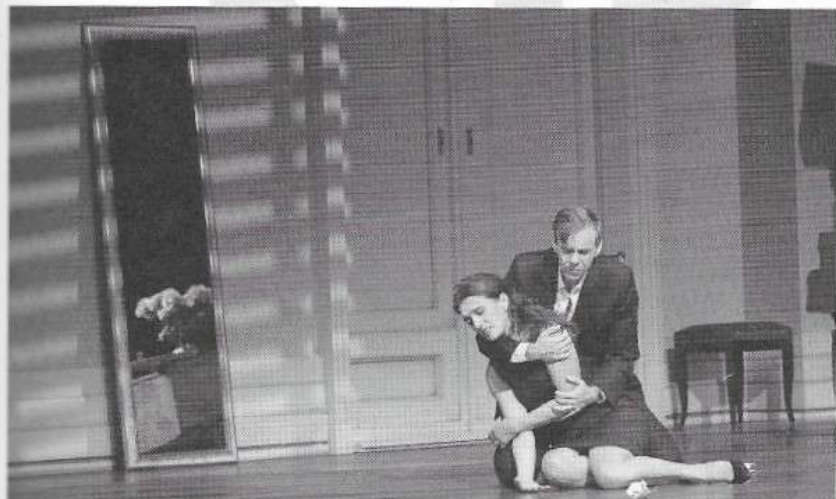


ブッチーニ《つばめ》スイス初演

チューリヒ歌劇場がこれだけ満足感たっぷりのシーズン開幕を迎えたのは何年ぶりだろう。クリストフ・ロイが提案した演目だという《つばめ》は、初演から現在まで106年間もスイスで上演されなかった意外な作品だが、それだけ待った甲斐がある。すばらしいドラマに仕上がっており、歌劇場は幸福感に包まれた。

「ブッチーニの音楽のなかでいちばん美しいものの一つ」と断言するマルコ・アルミリアートの指揮は、それにふさわしく歌手陣をゆったり歌わせては、急所を締め、メリハリが効いている。ヒロインのエルモネ



なんとこれまでスイスで上演されたことがなかったブッチーニ《つばめ》。ヤホ（左）とベルネーム（右）。チューリヒ歌劇場の上演から ©Monika Ritterhaus

ラ・ヤオは、歌唱技術はあるが美声ではなく、演技力はあるが体当たりすぎて美しくない歌手だと感じていたが、ロイが演出で上手く修正し、長所だけが光った。たとえば、弱音で高音を歌うとき、彼女は異常に大口を開けるのだが、今回はすべて顔を横に向けて凌いだ。高音が一度かすれたり、高音で歌いきるときに音程が下がったりしたが、すべてを帳消しにするほどマグダになりきっていた。そしていまをときめくテノールのパンジャマン・ベルネームと二人で、身を切られるような別れの苦しみを迫る真の演技で魅せた。美しい音楽、美的効果に長けた演出、臨場感のある演技と甘い歌声、というオペラの魅力的要素が、きちんとそこにあつた。あたりまえの基

本から逃げて奇をてらう演出が多いなか、ロイは貴重な演出家である。コケットなりゼツテを演じたサンドラ・アマウイ、正統派バリトンのウラディーミル・ストヤノフが扮するランバルド、キーバートソンの詩人ブルニエを好演したフアン・フランシスコ・ガテルなどにも恵まれ、合唱やバレエダンサーの一人ひとりまでみな、嬉々として演じていた。そのパワーが炸裂した第2幕では「ピース（アンコール）！」が早くも叫ばれ、しばらく舞台を中断せざるを得なかったほどだ。

前日の16日に催された歌劇場オーブン・デーには多くの来場者を迎え、2030年代後半にめどを立てている増築にも、多くのポジティブな反響が寄せられていることが報告された。そんななか、

このようなシーズン・オープニングの成功は、今後の発展のための重要な布石になりそうだ。

トーンハレ管の新シーズン・オープニング

もうすぐアジア・ツアーを控えているチューリヒ・トーンハレ管弦楽団は、設立第155シーズンが9月13日に始まり、パーヴォ・ヤルヴィ音楽監督の指揮で立て続けに2プログラムが披露された。3日間連続で、今季のフォーカス・アーティストの一人、キアン・ソルターニ（VC）を迎え、シューマン「チェロ協奏曲」とブルックナー「交響曲第9番」が演奏された。初日を所見したが、上等なベルシヤ絨毯のよう

な弾力のある音がオーケストラと溶け合う豊富な響きを堪能した。9月20、21日はオール・ベートーヴェン・プログラムで、コロナ禍で延期されていたオリ・ムストネンとの「ピアノ協奏曲」二長調（ヴァイオリン協奏曲）の作曲者自身によるピアノ編曲版）を、「序曲（献堂式）」と「交響曲第2番」で挟んだ。ムストネンは硬質な音色だが、嵐のようなカデンツァと、原曲の「ヴァイオリン協奏曲」を思わせる、鍵盤を挟んで弾くような、ピッツィカート表現で客席を沸かせた。乗りに乗っているこの管弦楽団の、いまを日本で聴けるのは貴重な体験となることだろう。

成功に終わったルツェルン音楽祭

今年25周年を迎えたKKL（ルツェルン・カルチャー・コングレスセンター）で開催されたルツェルン音楽祭について、前半のプログラムは先月の当レポートに、そして

ハイライトは今号の音楽祭特集に書いたが、そのほかにも充実したプログラムが満載だった。8月29日夜はアンドリス・ネルソンス指揮ポストン交響楽団が、プログラムにアンネ・ソフィー・ムターのために書かれたジョン・ウィリアムズ「ヴァイオリン協奏曲第2番」を持って来たため、世界初演のオリジナル・メンバーでスイス初演を聴くことができたのは有意義であった。

9月3日は、ジョヴァンニ・アントニーニ率いるイル・ジャルディーノ・アルモニコがEnsembleと、アネット・フリットチュのソプラノ、マクシミリアン・シュミットのテノール、フロリアン・ベッシユのバスでハイドン《四季》を演奏し、客席を沸かせた。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は今年、ヤクブ・フルシヤの指揮で登場し、9月5日はイゴール・レヴィットのソロでブラームス「ピアノ協奏曲第2番」を奏で、さすがウィーン・フィルと思わせる温かい美しさと、若さあふれるモダンな競演を聴かせた。休憩後のドヴォルジャーク「交響曲第8番」ではいきなりチェコの音に変わり、チェコの旋律を歌わせれば天下一品のフルシヤがウィーン・フィルに東欧の官能を吹き込んだ。エンディング・コンサートのみュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団は、予想以上のマラー「交響曲第2番（復活）」を聴かせた。ふんわりと小柄なミルガ・グラジニッチェイラのどこにこんなエネルギーが詰まっているのか。指揮台からのひと振りでもラーの心の叫びを音楽に込め、ミュンヘン・フィルハーモニー合唱団とタリーズ・トレヴィーン（S）、オツカ・フォン・デア・ダメラウ（Ms）と共に「復活」を謳った。